

第6章

結論



急斜面に挑む登山者
©Don Mason/CORBIS

はじめに

①

特徴
医の倫理の主要な

②

医師と患者

③

医師と社会

④

医師と同僚

⑤

倫理と医学研究

⑥

結論

付録

1 医師の責任と特権

本書は、医師の義務と責任に焦点を当ててきましたが、これは確かに医の倫理の主要部分です。けれども、すべての人間と同じように、医師には責任だけでなく権利もあり、医師が患者、社会、同僚などの他者からどのように扱われるべきかを考えなければ、医の倫理は不完全なものとなります。医の倫理におけるこのような観点は、多くの国の医師が職務を遂行するうえで大きな不満を抱えている現状において、ますます重要になっています。不満の原因は、限られた医療資源、医療提供に関する政府や企業のマイクロ管理、医療事故や非倫理的な医師の行為についてのメディアによる扇情的な報道、患者や他の医療提供者による医師の権威や技量に対する問題提起など、さまざまです。

医の倫理はかつて、医師の責任だけでなく権利についても考慮していました。アメリカ医師会の1847年版の倫理綱領など、かつてのものには、医師に対する患者や社会の義務という章がありました。それらの義務の大部分は今では時代遅れです。たとえば、「患者は医師の処方即座かつ絶対的に従うべきである。その処方の適切さについて、自らの未熟な意見を述べることで、処方を聴く際の注意力がそらされてはならない」。しかしながら、「社会は医師の資格に正当な評価を与え、……医学教育を促進するあらゆる奨励措置と便宜を提供しなければならない」という規定は、今でも妥当性があります。しかし、アメリカ医師会はこの章を改訂したり更新する代わりに、最終的には章ごと倫理綱領から削除してしまいました。

これまでに、WMAは、医師の権利とそれらの権利を尊重するための他者、特に政府の責任に関するいくつかの文書を採択しています。

- 1984年の**医学会議への出席の自由に関する声明 (Statement on Freedom to Attend Medical Meetings)** では、「WMAやその他の医学会議がどこで開催されようとも、医師がそのような会議に出席することを妨げるような障害があってはならない」と主張しています。
- 2006年の**医療の水準に対する医師の責任に関する声明 (Statement on Professional Responsibility for Standards of Medical Care)** では、「医師の

専門的行為や実践に関するいかなる判断も、研修や経験によりその医療問題の複雑さを理解する同僚の医師による評価を受けなければならない」と宣言し、「医師の作為ないし不作為に対し医療専門職による誠実な評価判断なしに、患者の苦情を処理する手続き」を強く批判しています。

- 1997年の拷問その他の残忍、非人道的または人格を傷つける処置への加担、および看過を拒否する医師に対する支援に関する宣言 (Declaration Concerning Support for Medical Doctors Refusing to Participate in, or to Condone, the Use of Torture or Other Forms of Cruel, Inhuman or Degrading Treatment) では、WMAが「そのような非人道的な行為への関与を拒否している医師やそれによる被害者の治療とリハビリテーションのために働いている医師に対して、援助や保護を与え、各国医師会にも援助や保護を呼びかけるとともに、医療上の守秘義務を含む最高次の倫理原則を遵守する権利を保障すること」を約束しました。
- 2014年の医療従事者の国際移動の倫理ガイドラインに関する声明 (Statement on Ethical Guidelines for the International Migration of Health Workers) は、すべての国々に対して、「自国のニーズや資源を考慮し、医師が個人的な目標や医師としての目標を達成するために必要とする支援を提供することによって、医師を国内に確保するとともに業種転換を防ぐよう最善を尽くす」よう呼びかけています。また、「自国以外で恒久的または一時的に勤務する医師は、その国内の他の医師と同等に処遇されるべきである (たとえば、職業上の選択肢に対する平等な機会や同じ業務に対する平等な支払い等)」ことを求めています。

前述のような医師に対する脅威や要求の数々を考えれば、医師のためのこのような擁護も必要ですが、ときには自分たちが享受している特権 (privileges) を思い起こすことも必要です。多くの国の世論調査によれば、医師は常に最も尊敬と信頼を集める職業のひとつです。医師は一般に、平均よりも高い (国によってははるかに高い) 報酬を得ています。以前ほどではないとしても、今なお相当大的な臨床上の自律性をもっています。医師の多くは、研究への参加を通じて新しい知識の追求という刺激的な活動に関わっています。最も重要な点として、医師は、個々の患者、特に社会的弱者や最も医療を必要としている人、そして社会一般にとって計り知れない価値があるサービスを提供しています。痛みや苦痛を取り除き、病気を治し、死にゆく者に安らぎを与えるという、医師が提供する恩恵を考

えれば、これほどやりがいのある仕事は、他にほとんどありません。倫理的責務を果たすことは、これらすべての特権を考えれば、小さな代償ではないでしょうか。

2 自分自身に対する責任

本書では、医師の倫理的責任を分類しましたが、これは患者、社会、同僚（他の医療専門職を含む）という主な利益享受者による分類でした。医師は、自分が自分自身や自分の家族に対しても責任を負っていることを忘れやすいものです。世界各地で、医師であることに対しては、自分の健康や福祉をほとんど考えず、医療の實踐に自己を捧げることが求められてきました。週60～80時間勤務もまれではなく、ときには休暇は不必要な贅沢と考えられています。多くの医師はこのような状況でもなんとかやっているようですが、家族には悪影響が及んでいるに相違ありません。なかには、明らかにこのような専門職としての仕事のペースに苦しむ医師もあり、その結果は、慢性的疲労から薬物乱用、自殺に至るまでさまざまです。疲労は医療ミスの重大な要因なので、健康を害した医師は患者にとっても危険です。

医師に健康なライフスタイルを奨励するとともに、患者の安全を確保する必要性から、国によっては、研修医が働く時間数や交替勤務時間の長さに制限が設けられるようになっていきます。今では、女性医師のために、家庭の事情による研修プログラムの中断をしやすい配慮した医学教育機関もあります。このような措置は医師の健康や福祉に役立ちますが、自己管理の第一次的な責任は、医師個人にあります。喫煙、薬物乱用、過労など明らかに健康を害する行為を避けるだけでなく、専門職としての生活と個人としての生活におけるストレスの要因を知り、適切な対処法を考え、それを実践することによって、自分の健康と福祉を守り、高めていくことが必要です。これらがうまくいかないときには、患者、社会あるいは同僚との関係に悪影響を与えかねない個人的問題について、同僚や適切な資格のある専門職の助けを求めることが大切です。

3 医の倫理の未来

本書は、過去の医の倫理を数多く参照しつつも、医の倫理の現在の状況に焦点を当ててきました。しかし、現在とは、絶えず過ぎ去っていくもので、常に時代に取り残されないようにするためには、未来を予測することが必要です。医の倫理の未来は、医療の未来に大きく依存します。21世紀に入ってから最初の十数年間で、医療は急速に進化しており、今の医学部1年生が研修を終える頃に、医療がどうなっているのかを予測することは難しく、さらに彼らが医療の現場から離れるまでにどのような変化が起こるかに至っては、まったくわかりません。さまざまな地域の不安定な政治・経済、環境破壊、HIV/AIDSの継続的拡大、その他感染症の可能性を考えれば、未来が現在よりよくなるとは限りません。医療の進歩の恩恵がようやくすべての国々へと広がり、そこで生じる倫理的問題は今日豊かな国々で議論されている問題に似たものだろうと期待することもできますが、その逆もありえます。現在豊かな国々が衰退し、医師が熱帯病の流行や深刻な医療供給不足に対応しなければならない状況に陥っているかもしれません。

未来は本質的に予測不能であることから、医の倫理もそれにフレキシブルに対応できることが必要で、実際はかなり前からそうなっています。しかし、医の倫理の基本原則、特に共感、能力、自律という価値は、基本的人権への配慮や献身的な専門職意識とともに、そのまま残るのではないのでしょうか。科学の進歩や社会、政治、経済的原因によって医療にどのような変化が起きたとしても、そこには常に病人がいて、可能ならば治癒 (cure) を、そして常に治療 (care) を必要としています。医師は伝統的にこれらのサービスを提供してきましたし、それ以外にも健康促進、疾病予防、医療システム管理といった活動を行ってきました。これらの活動のバランスは、将来変わるかもしれませんが、医師はこれらのすべてにおいて重要な役割を果たしていくでしょう。それぞれの活動には多くの倫理的課題が伴うため、医師は医療のその他の分野と同様に、医の倫理の発展を常に把握しておく必要があります。

これで本書は終わりますが、読者にとっては生涯続く医の倫理の研鑽のなかの一步でしかありません。「はじめに」で述べたことを繰り返せば、本書は、医の倫理の基礎的な入門とその中心的課題のいくつかを提示するだけです。本書を通じて、医療の倫理的側面、特に読者自身がこれから医療のなかで直面していく倫理

問題について常に向き合っていく必要性を理解してほしいと思います。付録Bに掲載されている情報源のリストも、この分野の知識を深めるために参考としてください。